

〔一〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

常識は英語で「コモンセンス」、フランス語だと「ボンサンス」といいます。「サンス」は、ラテン語の「センスス」から来ていて、知識や理屈りくつではなく、感じとることを意味します。「コモン」とは、共にということです。英国の歴史には、羊や牛を飼う牧草地や、そこで使う鋤すきなどの道具が共有だった時代があります。それが「コモン」と呼ばれ、共に羊などを育て合う中で、コミュニティ（共同体）ができていきました。

常識というところ、「総理大臣の発言は常識のいきを越えていない」とか、「あの人はいつも常識的なことしか言わない」とか、およそつまらないことという意味で使われがちですが、それとは違っています。人は不思議なことに、教えられなくても、誰でも共通して知っていることがあるのですね。言葉でも理屈でも、知識で分析して知っているのでもなく、感じて知っている。人間は決して、脳と神経と細胞の働きだけで成り立っているのではない、と私は思います。

B 私たちはいま、ある意味で恐ろしい、痛い世の中に生きています。大量破壊兵器があるかどうか、疑わしきを罰する。そして、それを上回る破壊兵器を持ち込む。日本人も出かけて行きました。一方、新聞を見れば、幼い子どもに煙草の火を押し付けて虐待したり、足蹴にして殺す親がいる。そういう時代に、私たちはどうたいしよしていけばいいのでしょうか。それには、「自分が痛いときは相手も痛い」というような、人間にとってごく普通のことを考えるのが大切だと私は思います。

それがコモンセンス——殺してはいけない、盗んではいけない、嘘をついてはいけない、が三つの柱。この三つを核とした十の教えと呼ばれるもののなのです。キリスト教では「神の十戒」といい、仏教では「仏の教え」にふくみこませています。アフリカのアニミズム（自然界に宿るたましいを信じること）であつても、イスラム教であつても同じです。私はフランスやスイスの住まいでは、イスラムの方たちにお手伝いをお願いしていましたが、本当にこころ優しく、他人のことを思いやる人たちでした。コモンセンスがあるから、アフリカの奥地に行つても、バルカン半島のコソボなど毎日のように紛争が起こっている所に行つても、私は必ず友だちを見つけることができるのです。

私たちはいま、悪循環じゅふくわんの世の中に生きています。何かが起こる、だからそれに報復する、その報復にまた怒る……この連鎖くさき（くさりのようにつながること）を断たち切らなくてはいけません。自分がされたことであつても他の人にそれをしない。憎にくしみや報復、恨うらみが連鎖するのを断つには、まず最初に相手を

ア ころころを願ねがひ求めることです。

ア というのは、戦争をして相手を傷つけ、殺すということの、百倍も千倍も勇気がある。恨みつらみの中に溺おほれてしまわずに、これまでのことよりも、いまから一緒に何ができるかを考えることです。

私がスイスで手術を受けたとき、看護婦が八人ついたのですが、七人が難民出身でした。小船で東シナ海を漂ううちに、若い母親が抱いていた赤ん坊が高波にさらわれ、鮫の口に吞まれた。母親は狂い、廃人になってしまった……。そんなことを目の当たりにしてきたから、誰かにひとつでも安らぎを与えられる人になりたいと、勉強してジュネーブの病院に入ったというベトナム人ナースもいました。痛みを知っているから、本当に至れり尽くせりでした。殺してはいけない、傷つけてはならない、痛ませてはいけない、苦しませてはいけないという気持ちで、とても強く感じられました。

いつの頃からか日本では、子どもに残酷な話を聞かせてはならないという世の中の傾向が起きました。私は小さい時、寝物語に「舌切り雀」の話をしてもらい、「舌を切るのはどう？ 噛んでごらん」と言われて、噛んでみたら痛かった。自分が舌を切られた雀の立場になってみたことで、一晩中、舌を切られた雀のことを思っ泣きました。

アンデルセンに「大きな悲しみ」という話があります。小さな子どもが一羽のカナリアを持っていて、大事な友だちだったのに、死んでしまう。アンデルセンがそれを書いた時代も平穏ではありませんでした。戦争の中で、一羽のカナリアの死など取るに足りない。でも、その子にとっては、担いきれない悲しみだった。カナリアが動かなくなつて、冷たくなつたとき、子どもの胸は張り裂けました。「フランダースの犬」にしても、「ヘンゼルとグレーテル」や「赤ずきん」などにしても、必ず悲しいところ、痛いところがあります。C それらを読んでいくことによって、四つや五つの子どもの心中にも、世の中には悲しいこと、痛いこと、辛いことがあるということが、なんとなく入る。童話やおとぎ話の意味はそこにある。コモンセンスは、すべての人間のこころの中にあるのです。

盗んではならないという一語の中に、大人になるにしたがつて、人の名誉も盗んではいけないということが入って来る。最近、とても気になるのは、事件の容疑者といわれる人をテレビでクローズアップしてうつすことです。その人の子どもや家族が、学校や職場でどんな思いをするか、胸が痛みます。事実とは関わりなく世の中の流れで、「あの親は悪いことをした。じゃあ、あの子だって……」となつてしまうようなときに働くのも、やはりコモンセンスです。DNA（遺伝子）がどんなに強くても、環境がどれほど影響しようと、一人ひとり異なるところに人間のすばらしさがあります。旧約聖書の最初に登場するエピソードのひとつは、カインとアベルという双子の兄弟の物語です。同じ親を持ち、同じ環境に育ち、一人は弟を殺す。なぜ創世記の最初にその話を持ってきたのか——私はそこに、聖書執筆者の知恵を感じます。決して④ いんが関係ではない。人間はみんな、考えて I 力を持っていると告げるために。一人ひとり自分では I ことができる。「人を殺してはいけない」「傷つけてはいけない」ということを、コモンセンスとして感じとり知っている。そして、自分で善も悪も I ことができる。人を殺し、傷つけるのは、戦車や銃などの武器だけではありません。D クロ・ズ・アップで容疑者の顔を追うことも、その家族を殺していくことです。体力腕力のない私にだって、人を殺すことは可能なのです。しかし、どんなに憎い相手でも殺してはいけない、嘘を言つてはいけない、傷つけてはいけない。そのたしなみや躰けの一番元にあるのがコモンセンスだ、と私は思います。

共通なものを持つているわれわれが、ひとつの理想を持つて集まった時、コミュニティができます。面白いのは、一人ひとりがみんな違わなければ、コミュニティにならないことです。みんな違うからこそ、ひとつの理念を持った時にコミュニティになって、お互いにコンブランドする。コンブランドは、お互いに理解し合う、一緒に何かの意味を持つ、お互いに分かち合う、ということです。

共通の人間性を持った人々が、コミュニティをつくつて、言葉を交わす。それが毎日できていくときに、明日を築くことができる、道をつけていくことができる、育てていくことができる、人と人とのコミュニケーションを取り戻さなくてはなりません。

きょう私が申し上げたのは、非常に小さなことです。しかし、その小さなことの中に、私自身は多くの教訓を学びましたから、それをみなさんと分かち合いたいと思いました。E 世界を動かすような大きなことも、結局はコモンセンスから始まります。

〔二〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

日本に引越して来て初めての夏。

今までは、毎年夏になると、お兄ちゃんとお母さんとわたしの三人で日本に来ていた。でも、今年はお母さんと二人。お兄ちゃんは、オクラホマのグランマとグランパ（祖母と祖父）の家に遊びに行った。

この夏、お母さんは離婚した。離婚すると、どっちか一方の親と生活することになる。はつきりしていたのは、わたしはお母さんと日本で生活する、ということ。アメリカにいるウォルター（お父さん）とは遠く離れただけで、また行ったり来たりできる。お兄ちゃんだって、来年の夏には日本に遊びに来るって言ってたし。みんな^(a) であることには変わらない……と思う。

夏休み中は、福島のおじいちゃんとおばあちゃんの家にいることになった。お母さんは、ときどき東京に仕事に行く。朝一番早い新幹線に乗るから、六時ごろ家を出る。

お母さんが休みの日は、午前中、一緒に図書館に行く。一階が子どもの本のあるところで、あまり人が来ない。お母さんもわたしも、アメリカにいた時の癖で、ヒソヒソ声で話すけれど、日本の図書館ではそんな必要はないみたいだ。みんな堂々と大きな声で話しているし、小さい子が騒いでいても、走り回っても、誰も注意しない。アメリカの図書館では、ちよつと話したり音を立てただけで周りの人から叱られていたのに。なんでこんなにちがうんだろう。

本の量は、アメリカの図書館の方が絶対に多いけれど、日本の図書館にしかないものがあつた。それは、紙芝居。

初めて見た時は、大きな絵が何枚もケースに入っていて、なんとなくワクワクした。お母さんは、ケースから厚い紙を取り出して、テーブルの上でトントンと両端を揃えようと、周りに人がいないのを確かめてから、わたしに「はい、前に座って」と小さい声で言った。そして、絵を立てたまま、「じゃ、行くよ」と話し始めた。

初めて見た紙芝居。こんなのアメリカにはなかった。マジックみたい。本を広げて脇で読んでもらうより、こっちの方が絶対にいい。「どれ借りようかな……」お母さんは、最初から目的のものがあるように、あちこちを探し回った。そして、「あつた、あつた」と嬉しそうに紙芝居を二つ取り出した。選んだのは、『てぶくろを買いに』（新美南吉）と『きつねとぶどう』（坪田譲治）。

「両方とも、きつねの話だよ」受付に行く階段を上りながら、お母さんが言った。

「きつねの話？ それ、知ってる。イソップ物語！ きつねがぶどうを取ろうとしたんだけど、何度ジャンプしても届かなくて、最後に『フン、どうせあんなの、すっぱいぶどうだよ』っていう話。でも、あれ、わたし、あんまり好きじゃない」

「その話じゃないよ」

「え？ ちがうの？ じゃあ……、ネコときつねの話？ 二匹のネコがごちそうの取り合いをしてるところにきつねが来て、『ケンカしないように、ちよつど半分にしてあげるよ』って言って、片方のネコに『こつちが多いから』と言って少し食べて、もう一匹のネコにも『こんどはこつちが多くなつちやつた』と言ってまた少し食べて、それを繰り返しているうち、きつねがごちそうを全部食べちゃつた、って話」

「残念でした。それもちがうよ」「……え？ なんで？」

お母さんは、ため息をついて言った。「日本のきつねは、そんないいわるじゃないよ。」

1

家に帰ると、さつそく居間のテーブルで紙芝居が始まつた。最初の話は、『てぶくろを買いに』。

お母さんきつねは、きつねを人間の町へ行かせることにした。てぶくろをかうのが目的なので、まず、坊やの片方の手を人間の手に変えた。そして、「人間の手のほうを出して、『この手にちよつどいいてぶくろをください』っていうのよ。きつねの手は出しちゃだめよ」と言った。坊やは雪の中を走って、人間の住む町へ行った。お店のドアを叩いたところまではいいけれど、坊やは、まちがえてきつねの手を出してしまった。でも、その店のおじさんは、きつねの子だと知りながら、親切にてぶくろを売ってくれた。帰り道、きつねは、家の窓の向こうに、人間のお母さんが子守唄をうたっているのを見る。そして、お母さんきつねに早く会いたくなって、大急ぎで家へ走つた。お母さんきつねは、坊やが戻ってくるのを、ずつと外で待っていた。坊やが、「人間ってこわくないよ。こんなにあたたかいてぶくろを売ってくれたよ」と言うと、お母さんきつねは、「ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやく。そして、お母さんきつねと子きつねは、真っ白い雪景色の中を家へ帰っていく。――

A 少しさびしくて、やさしくて、あつたかい話。ちよつと不思議なのは、お母さんきつねが、子きつねをひとりで町に行かせたこと。こわい人間の住むところなのに。アメリカでは、小さい子がひとりでどこかに行くなんて、絶対ダメって言われていたし、ひとりで学校に行くのもダメだった。でも、この話の中で、お母さんきつねは、子きつねが帰ってくるのを外でじつと待っていてくれたし、子きつねは、ちゃんとひとりで買い物をして帰ってきた。

2

次の話は『きつねとぶどう』。

きつねの坊やがおなががすいたので、お母さんきつねは、ひとりで食べ物を探しに行く。山を三つ越えてぶどう畑に着くと、お母さんきつねは、ぶどうをひと房、口にくわえて、大急ぎで家へ向かつた。途中、疲れたのでひと休みすることにした。もう家の近く

まで来ている。そのとたん、犬が吠えるのが聞こえた。猟師が近くにいることに気づいて、お母さんぎつねは、大きな声で叫んだ。「コーン、あぶない。早く逃げなさいー!」と。子ぎつねはびっくりして逃げ出した。それから一年、二年と過ぎて、子ぎつねは立派な若者になった。でも、お母さんぎつねは帰ってこなかった。ある日、小さい頃お母さんと住んでいた辺りに来たら、そこにだけ一本のぶどうの木があった。ぶどうを食べてみると、とってもおいしい。そして、その時急にお母さんが「待っておいで。おかあさんがおいしいものをとってきてあげる」と言った声を思い出した。その瞬間、どうしてお母さんがそこにいないのか、わかった。――^B「すごく悲しくてさびしい話。でも、あったかい。」「賢くてやさしいきつね」ってほんとだ。ここに出てくるきつねは、まるで……^①

3

実際に何が起きたのか、この後どうなったのか、すごく気になる。はつきり説明していないので、わたしは、もう一回、もう一回、と何度もお母さんに読んでもらった。

不思議なことに、『てぶくろを買いに』も『きつねとぶどう』も、お母さんと子ども二人だけの話だ。お父さんはいない。きょうだいもない。

4

ちょっと違うのは、両方の話とも、きつねが男の子だということ。このきつねのように、いつかわたしも、お母さんから「ひとりで行っておいで」と言われるのかもしれない。

それから毎日、夜寝る前に、きつねの話を読んでもらった。一日のうちに、お母さんの声が一番やさしくなる時だ。声が高くなったり低くなったり、最後は消えるように終わる。読んでもらいながら、この間、お母さんから聞いたことを思い出した。お盆が終わったら、東京に引越しをする。お母さんの仕事も忙しくなる。去年とちがって、夏が終わってもアメリカに帰らない。

久しぶりにお母さんの休みの日が来た。午前中に図書館に行く、と話していたのに、今日は朝から空が暗い。

「カサ持っていく?」「ううん、いいよ。車だから」

でも、わたしは、念のためにオレンジのビニール傘を持^{かさ}った。ときどき朝の散歩に持っていく、わたしのお気に入りの傘だ。

きつねの紙芝居を二つ返してから、新しい紙芝居を探したり、お母さんが借りる本を探したりしているうち、少しお腹がすいてきた。窓の外では、雨がザーザー降っている。お母さんは、「失敗しちゃったね。ハナエの言うとおり、傘持ってくればよかったね」と言った。入り口では、雨が止むのを待っている人が何人もいる。わたしは傘立てからオレンジのビニール傘を取り出して、お母さんに見せた。お母さんはびっくりした顔で、「えー、持ってきたの? ハナエ、持ってきてくれたの?」とうれしそうに言った。わたしは、ちょっと(1)ような(2)な気持ちになって、ウン、ウン、とうなずいて、傘を差し出した。

「でも、この傘、小さいから、ハナエがひとりで使っていていいよ。お母さんは車まで走っていくから」

お母さんは、本と紙芝居を大きな手提げ袋^{かぶろ}にザツと入れて、それを抱^{かか}えて走り出そうとした。

「だいじょうぶ。いっしょに入れるよ」わたしは、急いで傘をお母さんの前に出して言った。

「ありがとう。じゃ、入れてもらうね」お母さんは、わたしの方に傘を傾^{かたむ}けて、体を屈^{かが}めた。

目の前がほとんど見えなくらい、雨粒^{あめつぶ}が地面に叩きつけられて跳ね上がる。わたしのサンダル履^はきの足はびしょびしょに濡れてしまい、お母さんもスカートが足に張り付いている。わたしは車のドアを開けて後部座席に乗り込むと、運転席に座って、振り向いて笑うお母さんを見て、初めて気づいた。右側の肩^{かた}から下がびしょりぬれている。小さい傘だったし、わたしのほうに向けていたから、あんまり役に立たなかったんだ。タオルがあるから拭^ふけばいいのに、お母さんは濡れていることにも気づいていないみたいだ。

「ハナエ、ありがとね」

わたしの傘は小さすぎたのに、「ありがと」って言ってもらえた。「ありがと」って言われるのって、うれしい。なんだか、急に……になったような気持ちだ。

だいじょうぶかも。わたし、これから、いろんなこと、ちゃんとできるかも。お母さんがいない時も、ひとりでだいじょうぶかも。図書館の帰りは必ず和菓子屋さんに寄^よって、お団子を食べる。奥^{おく}で、おじさんとおばさんが二人でお団子を作っている。小さいテールブルが二つだけあって、そこで食べていく人はめったにいない。音楽も何もなく、水槽の音だけが静かに聞こえる。おばさんがあつたかいお茶を持^もってきてくれて、薄暗^{うすく}いお店の中で、お母さんと二人で水槽を見ながら、団子を食べた。

「お盆終わったから東京に行くの?」「そう。もうすぐだよ。早く行きたい?」「……うん」

アメリカの友達は、九月からは一年生になる。でも、わたしは、来年の四月にやっと一年生になる。それまでは、保育園に行くことになるそう。きっとそこにはアメリカ人はひとりもない。日本人ばかりだと思う。

初めての長い日本の夏は、もうすぐ終わろうとしている。秋になったら、新しい生活が始まる。新しい友達もできる。

「人間って、ちっともこわくなかったよ」子ぎつねは、帰ってきた時、そう言っていた。だいじょうぶ……。きつと、うまくいく。

水槽の中の金魚を見ながら、わたしは、心の中で繰り返し返していた。

第一回 国語科問題

〔一〕 (一) 「コモンセンス」とはどのようなものだと筆者はとらえていますか。〔A〕の部分から考えて三十字以内で書きなさい。

句読点もふくみます。

(二) 線Bとありますが、「恐ろしい、痛い世の中」とは具体的にどのような世の中をさしていますか。文中からふさわしい部分を十五字以内で探し、解答らんにつづくように書きなさい。句読点もふくみます。

(三) ①～④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

(四) 線a、bの意味となる二字の熟語を考えて書きなさい。

(五) 〔 〕 ア、イには「知る」のような動詞が入ります。それぞれふさわしい言葉を考えて書きなさい。同じ記号には同じ言葉が入ります。

(六) 線Cとありますが、それは読み手がどうしながら物語を読むからですか。解答らんにつづくように十字以内で書きなさい。

(七) 線Dとありますが、それはどういうことで、なぜそれがいけないのですか。自分のことばで書きなさい。

(八) 線Eとありますが、筆者はなぜ「コモンセンスは世界を動かす」と考えているのですか。文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。

〔二〕 (一) 〔 〕 1～4にはつぎのA～Eのどの文が入りますか。最もふさわしいものを選んで、記号で書きなさい。

A でも、この、きつねの話はちがう。

I そうかな。やさしいきつねなんて、ほんとにいるの？

U そこが今のわたしと少し似ている。

E わたしが覚えていた「ずる賢いきつね」とはちがう。

(二) 〔 〕 ①～③にはどのような言葉が入りますか。ふさわしい言葉を考えて、二字の熟語を書きなさい。

(三) 線A・Bで「わたし」が日本のお話を、両方とも「さびしい」のに「あったかい」と感じたのはなぜですか。自分のことばで書きなさい。

(四) 1 と 2 には、入りまじった感情を表す言葉が入ります。次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

A おもしろい I はずかしい U くやしい E 悲しげ O 得意げ K 不安げ キ 楽しげ

(五) 線Cとありますが、「だいじょうぶ……。きつと、うまくいく。」と思ったのはなぜですか。「わたし」の気持ちを文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。